

# 中世末期ジェノヴァにおける 「アルベルゴ」の生成

永 沼 博 道

「アルベルゴ」とは何か

海上都市国家の二つのライバル都市、ヴェネツィアとジェノヴァが、14世紀の商業上、人口上の危機的状況のなかで、一方が貴族層の結束により政治的安定を長期にわたって確保し得たのに対し、他方は、都市の有力者グループの党派的抗争の中で政治的安定を欠き、国家を弱体化させていった。後者すなわちジェノヴァにおける政治的抗争の主役となったのが、アルベルゴ<sup>(1)</sup> albergo と呼ばれる一種の門閥集团的組織であった。ジェノヴァの都市とし

---

(1) アルベルゴ albergo は一般には旅館を意味する。本論文で取り扱うアルベルゴは中世ジェノヴァ独特の用法である。アルベルゴという呼称が使用された理由についてはかならずしも明らかとはいえないが、16世紀にフェデリーチ F. Federicci は次のように書き著している。「多くの人々が宿泊する旅館におけるが如く、このように互に寄り集まり、統合されたあの家族集団は、そこに参加しながら個有の姓を維持している家族の多様さと類の多さの故にアルベルゴと呼ばれる。」Grendi, E., "Profilo storico degli alberghi genovesi", *Mélanges de l'Ecole Française de Rome* 87, 1975, pp. 243—244.

Heers は地中海世界に広くみられるクランの典型的な例として、同族団的性格を強調している。アルベルゴが系族なつながりにもとづくものであったのか、それとも地縁的結びつきによること大であったかは、アルベルゴの性格を理解する上で極めて重要であり、本小論のテーマでもある。

Heers, J., *Le clan familial au Moyen Age*, Paris 1975.

での発展期に自ら進んで都市へ移住し、大商人の一員としてジェノヴァの商業上の拡大に貢献したりグーリアの封建貴族層は、その後も封建領主ないし豪族として性格を変わることなく持ち続け、コムーネの成立後も、都市の支配層としての地位を確保していた。<sup>(2)</sup> 彼等は都市の支配権をめぐる互に抗争をくりひろげ、領主的行動様式を都市に持ち込み、都市内部にその包地 enclave を確保し、一族で排他的に領有した区画の拡大をはかっていた。アルベルゴ形成の最初の母体となったのはこれら封建貴族の系族集団である。13世紀後半に最初の言及が現われ、14世紀にその急速な発展が確認される。大小様々なアルベルゴのなかで、早い時期に結成され、その後も有力な地位を占めつづけたのはドーリア Doria, スパノラ Spinola, フィエスキ Fieschi, グリマルディ Grimaldi 等の貴族を中心としたアルベルゴであった。

アルベルゴを構成する諸家族間の結束は、同じ区画内で互に密接した家屋に居住するという隣人間係によって強化され、それぞれの館群は一種の要塞として、他のアルベルゴに属する区画には背を向けていた。それぞれのアルベルゴは独自の集会所ロτζジャ loggia を持ち、構成員は商売も気粉しもこのロτζジャにおいてなされた。<sup>(3)</sup> このことは成員のアルベルゴへの帰属意識を高めること大いに貢献したのであろう。中心の館には塔が設けられ、互の力を誘示しあうかのように、ジェノヴァ市には塔が林立していた。

アルベルゴがジェノヴァの歴史に姿を現わすのは、13世紀後半のことである。ジェノヴァの年代記において、1267年スピノラ家に対して強めてアルベ

(2) フィレンツェの場合は、都市が周辺封建領主に対して優位をもち、1184年アルベルティ伯を屈服させたように、武力で制圧して都市への移住を強制した。清水廣一郎「イタリア中世都市国家の構造」『イタリア中世都市国家研究』岩波書店 1975年、10頁。

この場合、領主権の大きな後退が見てとれるのに対し、ジェノヴァの場合、Heers が注目したフィエスキ家に典型的にみられるごとく、封建領主のままで都市の有力な政治支配者となっていた。

(3) Hughes, D. O. "Urban Growth and Family Structure in Medieval Genoa", *Past and Present* 66, 1975.

ルゴという呼称が用いられた。1270年代の公証人記録は、スピノラの姓を称し、永続的な社会・政治同盟を結成しているスピノラ地縁集団について言及している。また1293年の年代記には、スピノラとドーリアのアルベルゴについての記載が見られる。アルベルゴ・グリマルディについての最初の記載は1295年公証人記録の中においてであり、デラ・ボルタ Della Volta, カッターネオ Cattaneo, ゼンティーレ Gentile, インペリアーレ Imperiale 等のアルベルゴが14世紀初頭に相ついで姿を現わしている<sup>(4)</sup>。

これらのアルベルゴの呼称からも明らかなように、初期のアルベルゴは有力貴族の系族親族を中心とした集団であった。しかるにアルベルゴの展開期である14世紀の経過中に相ついで結成されたアルベルゴは、互に相接して生活しているという地縁的紐帯にもとづいて創設されている。そこでは、系族的な結びつきは擬制的なものとなり、隣人と連合体をつくって経済的・政治的ならびに人口の危機に対処しようとする動きが反映されている。ジェノヴァのコムネ創設以来絶え間なく続く血みどろの闘争のなかで、貴族達は隣人関係に依存度を高めていった。有力貴族達は婚姻を通じて地区の有力な隣人達を一族に吸収していった。貴族出の女性達は、身分の劣った男と結婚し、その夫は一族の商業上のパートナーや代理人となって活動することとなった<sup>(5)</sup>。

下層民に対するアルベルゴによる保障の提供は、下層民同志の地縁的な隣人関係とこわし、アルベルゴの中へ手下 *clienti* として受け入れることによって一層アルベルゴの地位の安定に貢献した。ポポラーニ *popolani* (平民)の隣人との結婚と下層民への保護は、14世紀の平民支配を早く脱脚して、貴族に継承され在位と権益の保全に貢献したのである<sup>(6)</sup>。

(4) Hughes, D. O., "Kinsmen and Neighbors in Medieval Genoa", Miskimin, Herlihy and Udvitch eds., *The Medieval City*, New Haven 1977, p. 109.

(5) *Ibid.*, p. 101.

(6) 下層民族保護の家父長制的関係ないし親分子分的関係が、ローマの伝統であ

### 貴族支配の伝統

ジェノヴァにおけるコムーネの起源は、コンパーニャ *compagna* と呼ばれた任意の地域的団体から出発している。コンパーニャは、都市の発展の過程で、ボニ・ホミネス *boni homines* と呼ばれる指導的階層を中心とした私的誓約団体として生まれ、次第に住民へ政治的統制を加えていく政治組織化していった。コンパーニャは、カロリング期の要砦であったカストルム *castrum*、その外側にあつて市壁をめぐるしたキヴィタス *civitas*、市壁の外の安位民たるブルグス *burgus* に基礎を置き、カストルム内にパラッツォーロ *Pallazolo*、ピアッツァ・ルンガ *Piazza Lunga*、キヴィタス内にマッカーニャ *Maccagnana* サン・ロレンツォ *San Lorenzo*、ブルグスにポルタ・ソツィーリャ *Porta Soziglia*、ボルゴ *Borgo* の各コンパーニャが存在した。各コンパーニャは5ないし6のコネスタジア *conestagia* によって構成されていた。1134年にはコンパーニャ・ボルゴが分かれてポルタ・ノーバ *Porta Nova* が生まれ、14世紀には市の拡張とともに新たにボルゴ・サン・トマーゾ *Borgo S. Tommaso* とボルゴ・サン・ステーフアノ *Borgo S. Stefano* が付け加わって10のコンパーニャが存在することとなった。<sup>(7)</sup>

ジェノヴァのコムーネは、コンパーニャ・コムーニス *compagna communis* <sup>(8)</sup> として、1099年に始めて年代記に現われる。都市の拡大、ピサ等他都市との競争の激化、とりわけ第一十字軍に伴う対イスラム戦に備えた戦闘集団の組織化が新たな市民の統一組織を求め、コムーネの誕生となったのである。このコンパーニャ・コムーニスは、各地域コンパーニャ *compagna locale* を代表する任期4年のコンスル *consul* (=console) によって構成された

---

る貴族の平民保護に、いくらかでも由来するものか否か検討する必要があると思われる。

(7) Hughes, D. O., "Kinsman and Neighbors", p. 94.

(8) Ibid., p. 16. De Negri, T. O., *Storia di Genova*, Milano 1974. p. 232.

ジェノヴァのコムーネは、社会階層や組合ではなく個人に基礎を置き、自発的・一時的なものであつて、更新ごとに宣誓がなされた。Ibid., p. 235

一時的組織であった。新しく生れたこの連合は、自由意志に基いた私的機関であり、特定の目的のため期間を定めて設けられたものであった。しかも、この組織は全市民の統一的な機関というよりは、地域に基礎を置いた各コンパーニャが形のうえで統合されたものにすぎず、いわば地域コンパーニャの連邦的統合であった。<sup>(9)</sup>各コンパーニャを牛耳る貴族層の党派的抗争の中で、コンパーニャ・コムニス<sup>(9)</sup>は効果的な統治機関に成長することを阻げられた。

ジェノヴァの貴族は、地域連合に対して反対し、その系族的紐帯によって地位を確保しようとする動きを強め、出身地である農村における封建貴族そのままに、都市内部においても領土的要求をあらわにしていた。12世紀において既に有力な貴族は、都市の戦略的資産の獲得を競い合っている。1186年において、ジェノヴァの3つの主要市場は、都市貴族の館によってとり囲まれていた。これらの建物の21名の所有者の全ては貴族で、そのほとんどは副伯の出身であった。ドーリア家はサン・マッテオ San Matteo 教会の周囲に土地を確保し、丘へ向って所有地を拡大していった。その結果、ドーリア家はコンパーニャ・ポルタにおける唯一の大不動産所有者となったのである。

貴族の系族集団は、同一の建物もしくは隣接した建物に居住して、そこで一族の事業を行っていた。また私有の教会もしくは教区教会に付属させた礼拝堂において祈りをささげたのである。サン・マッテオ教会は、1125年にドーリア家の中央教会として確保され、やがてそこにはドーリア家先祖の遺骨や遺品が安置されるようになった。メルカート・サン・ジョルジョ Mercato San Giorgio のデュラ・ボルタ家 Della Volta の居住地区においても、共同の店舗・倉庫・浴場を備えた一族所有の1ダースもの建物によってサン・トルペト San Torpet 教会を取り囲んでいた。<sup>(10)</sup>

他の貴族達も、各々の包地を一ヶ所に統合し、主要な館に塔を備えてその

(9) Vitale, V., *Breviario della Storia di Genova* I, Genova 1955, pp. 13—18.

(10) Hughes, D. O., “Kinsmen and Neighbors”, p. 100.

勢力を誘示した。貴族の定住地が設けられた港に近い低地一帯は、一族の建物が密集して立ち並び、1エーカー当り60を越す建物によって埋めつくされていた。<sup>(11)</sup>塔を備えた背の高い建築が林立する姿は、まさしく「誇り高き都」La Superba（ジェノヴァの別称）にふさわしい都市景観を作りあげたのであろう。

一方、1エーカー当り8以下の家屋数と密度の低かった丘陵地帯のポボラーニの居住区では、隣人関係に基づく親密な人間関係が存在した。コンパーニャを構成するコネスタジアが実効ある隣人関係を育て、教区教会の広場は取引の場、集会所となった。コネスタジアないしヴィチーニア vicinia は、平民層における地縁集団であり、同族・親族に集团的要素は少なく、個人の集まりであった。<sup>(12)</sup>

しかしながら、この自然な隣人関係はやがてアルベルゴのもとに組織化された集団の挑戦を受け、コンパーニャもまた政治的経済的重要性を失っていた。その過程が1339年の平民の政府の成立とともに一層進展していったことは皮肉である。ポーポロ（平民層）の台頭に対する有効な反撃手段こそがアルベルゴであった。

#### 同族的集団か、地縁の集団か

J. Heers は、アルベルゴを中世末期ヨーロッパ世界に広く存在した一種の同族集団クランとして見る。貴族によって支配されたこの集団の初期における強い系族的紐帯に注目して、Heers はアルベルゴを「真正のクラン」であり、「ジェノヴァは中世都市内部での家族集団の役割の最も明白な例を提供している」とみなす。<sup>(13)</sup>ジェノヴァのアルベルゴが「比類無き重要性、凝集

(11) Ibid., p. 103—104, Heers, J., “Urbanisme et structure sociale à Gène au Moyen Age”, *Studi in onore di Amintore Fanfani* I, Milano 1962.

(12) De Negli, T. O., *op. cit.*, p. 637, Hughes, D. O., “Kinsmen and Neighbors”, p. 106.

(13) Heers, J., “Urbanisme et structure sociale”, p. 384.

力、永続性をもっていた」としても、それはジェノヴァ特有の現象ではなく、トスカナの *società dei torre* や南ドイツの *Eigenbefestigungen* にも比すべきものであると理解されている。それら都市貴族による同族集団は、都市の戦略的位置に要塞化した館を所有し、その政治・商業活動をコントロールしていた。<sup>(14)</sup> 館に所属する塔は、その勢力を誇示するシンボルでもあった。

都市を支配する同族集団には、多くの場合貴族の資格が求められた。封建領地を所有する貴族は、農村地帯から都市が必要となる戦闘員、例えばガレー船の乗組員を提供することが出来た。都市における貴族の力は農村に由来していた。ジェノヴァにおいて、それはドーリアであり、スピノラ、グリマルディまたフィエスキであった。ジェノヴァにおいて貴族はいずれかのアルベルゴの一員であり、アルベルゴによって都市を支配していたのである。後に平民によって結成されたアルベルゴは、貴族のアルベルゴのイミテーションにすぎないと Heers <sup>(15)</sup> は見る。

しかしながらアルベルゴは、はたして Heers の主張の如く同族集団として理解されるべきものであろうか。アルベルゴの創設において地域的紐帯は血統にもとづいた紐帯に劣らず大きな意味を有していた。アルベルゴは、その呼称の通り多数の家族集団を含んでいた。系族上のきずなが無視できないものであったとしても、隣人関係が大きく作用する地域集団であった。スピノラ家はルッコーリ *Luccoli* とサン・ルカ *San Luca* に分かれてアルベルゴを作り、*Di Mari* 家がサン・ピエトロとルッコーリに分裂してアルベルゴを形成した等に見られる如く、一つの系族に属する家族集団が別々のアルベルゴに属することも見られた。アルベルゴ・スピノラの形成に参加した者の多くは、むしろ傍系の家系に属していたものとみられている。<sup>(16)</sup> アルベルゴは

(14) *Ibid.*, pp. 384~5.

(15) Heers, J. *Le clan familial* p. 235.

(16) Grendi, E., "Problemi di storia degli alberghi genovesi", *La Storia dei Genovesi I*, 1985. p. 290.

また、しばしば同等の者同志の集合体であった。アルベルゴ・カッターネオの場合、サン・ジョルジョにおいてボルタ家とマッローネ家の一族によって14世紀始めに結成されたものである<sup>(17)</sup>。

アルベルゴを創設したのは名門貴族に限られず、平民出の富裕な商人によっても形成された。キオス島 Chio を征服し、ジェノヴァの有力な金融家でもあったジュスティニアニ家 Giustiniani は貴族ではなかったが、1346年のキオス島遠征に参画した多数の家族集団と共に居住していた<sup>(18)</sup>。

14世紀前半が経過する中で、アルベルゴ形成の原則はより一層地縁的なものとなり、その傾向は平民のアルベルゴや中小の貴族アルベルゴにおいて顕著である。一方、ドーリア、スピノラ等有力な封建貴族を中心家族とするアルベルゴにおいては、家父長的な保護の組織の性格を強めてくる。外国商人もまたその保護と援助を求めて、その包地内に居留地をかまえることとなった。「依存関係の垂直的構造」<sup>(19)</sup>をもったアルベルゴは、階級を越え、貧富を越えて多様な階層の人々を内にとり込み、その中で親分・子分関係を拡張していき、それによってポポーロの勢力を分断した。まさにそれ故に、アルベルゴに結集した都市の有力者層は、13世紀後半から力を伸ばし14世紀に生れたポポーロの政府を打倒して、自らの権益の保全に成功したのである。半面共和国政府はより一層、弱体化し、ジェノヴァの国家の不安定と外国勢力の介入の口実を与えてしまったのである。ジェノヴァの政治的混乱の原因は、しばしばジェノヴァの個人主義的精神に結びつけて理解されるが、地縁的結びつきによって再編成された都市有力者層の団体アルベルゴ相互の孤立とその排他性に原因は求められるのではなかろうか<sup>(20)</sup>。

(17) Hughes, D. O., *op. cit.*, p. 109.

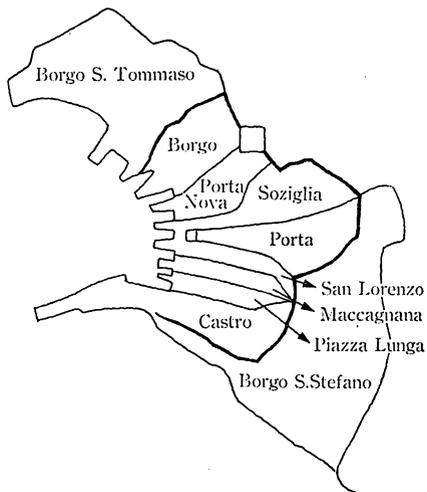
(18) Heers, J., "Urbanisme et structure sociale, p. 385.

(19) Grendi, E., *op. cit.*, p. 290.

(20) ジェノヴァ人の心性における個人主義的傾向については、拙稿「中世ジェノヴァ商人の心性について」『商学論集』第31巻第1号(1986)、56—66頁参照。

(付図) ジェノヴァのコンパーニャ (15世紀)

(太線内：コムーネ成立時)



(出所) Heers J., "Urbanisme e structure sociale" p. 407 より